第２回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会　会議録

会議名 （審議会等の名称）		第２回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会
開催日時		平成１９年１２月２７日（木）午後１時００分～午後３時００分
開催場所		市役所５階　全員協議会室
出席状況	検討委員	６名（小川委員、倉田委員、桑谷委員、西巻委員、古橋委員、米屋委員）
	アドバイザー	（株）シアターワークショップ　伊東氏ほか２名
		（財）大和市スポーツ・よか・みどり財団　大軒氏
	事務局 （担当課）	３名（企画政策課長ほか２名） 企画部　企画政策課　総合政策担当　　（内線　５３０４）
	傍聴人数	１名

１．会議次第
（１）大和市の概況について
（２）提言書の策定にあたって
（３）その他

２．議事要旨
（１）大和市の概況について
○（財）大和市スポーツ・よか・みどり財団より資料「（財）大和市スポーツ・よか・みどり財団の主な文化事業について」説明。

委員長：大和市の文化施設や芸術文化活動の状況を踏まえ、何かご意見、ご質問はないか。

①　質疑

委　員：会場外の雑音が中に入ってくるというのはどのホールで、またどういった音か。

財　団：保健福祉センターホールで、人の話し声が聞こえるといった意見が寄せられている。

②　意見

委　員：今後、本施設の配置としてどこがふさわしいかという議論になるかと思うが、市の地形を考えると、来館者の利便性への配慮が必要となる。また、若い人の参加に配慮すると、自転車や公共交通機関での便の良さがポイントになると感じた。市内に候補地が複数ある中、既存施設とどう共存しどう運営するかということも併せて検討する必要がある。

委　員：市内を見学した際、広場で子ども達が遊んでいる姿が印象的で、広場が地域に根付き、住民に愛されているのだとうらやましく感じた。例えば、そういった場所に劇場を作った場合に、代わりになれるかという重責と難しさを感じた。現在の雰囲気を壊さないまま、人が沢山集まれるような、既成の文化会館ではない施設がつくれたらいい。

委　員：学習センターでは地元の方の文化活動が定着している印象を受けた。そのような資源を活かして、新しいホールとどう結びつけるかが重要なポイントと言える。構想としても、ホールを発表の場として捉えて検討するのか、それとも文化活動の質的な面を

考えるのか、慎重な議論が必要である。
生涯学習センターホールは古く、使う側のご苦労が伺えた。ホールの見学の際、正面から入ることが出来なかったが、理想としては誰でも正面から入れる施設であってほしい。生涯学習・社会教育の質的な転換を図ることの必要性を感じた。

委　員：劇場は屋外でも旗を立てれば劇場になってしまう。広場でも、芝居をやろうと思えばできる。そのような野外劇場も魅力だが、今はその議論はしないでおく。
コミュニティ活動の延長としての文化活動が盛んで素晴らしいと感じたが、「ハイアート」の部分がないのかもしれないと感じた。また、それを市民が求めているのかどうか気になった。敷地的な条件では、広い道路や土地があまりないので難しさを感じた。劇場はフライズ（舞台上部の幕類を収納しているスペース）の高さでビル１０階程度分が必要になる。小劇場なら良いが、１，０００席程度の劇場は難しいのではないか。

委　員：広場・公園といった場所に劇場を建築する際に、使われている現状からどれだけ効用があるか、比較検討する必要がある。同時に、古い施設も改築の時期に来ており、改築と新築を併せて検討する方法もある。
どこに建設すべきかという点については、限られた土地の中で検討する際、隣接する公共施設なども含めた複合施設の中にホールを設置する考え方もある。近隣が住宅地か繁華街かも検討のポイントと言える。
市内の状況を伺って興味を持ったのが、市内に民間のホールがあるという点である。能楽堂は特殊だが、その他企業が持っているホールなどが市民の文化的な生活の中でどういう位置づけなのか、どういう利用度なのか等、詳しく知りたい。ホールを建設することで流動性や競合性が出るのではなく、機能を補完しながら、新しい展開ができるよう検討する必要がある。
基地の騒音については多い時期で１日数１０回、１００デシベル以上の騒音を当初からの前提として考えるべきである。
騒音の問題は市内全域か、場所によって違うか。

事務局：滑走路の北側１キロのポイントに観測器が設置されており、その観測機がカウントした回数である。必ずしも離発着とは限らない。飛行機の高度が低くなる南林間・鶴間地域などは大きな騒音となっている。

委員長：各地域にある施設と本施設は性格や建築条件も違い、また市が南北に長いため、市民のアクセスしやすさも重要なポイントである。車のみに頼った施設は大規模な駐車場の確保という問題もあり、好ましくない。そういった条件の中で敷地を探すのは難しい作業になる。
公園等は、公園として歴史があり、新しい施設が取って代わるには問題がある。
周辺施設との合築という方法もある。施主が複数だと調整が大変になるが、機能が複合化されるため、市民が足を運びやすいという利点がある。手続きとしては煩瑣だが、共存できれば良い施設になり、意味があるのではないか。
建て替えの場合、建設期間中既存施設が利用できないという問題が考えられる。
従って、完全に何のトラブルも無く建設出来る場所は無いと考えるべきである。
運営については地区レベルの文化活動と本施設での活動の連携が必要と感じた。活動をどう育てるかを考える上でも議論が必要である。

委　員：学習センターの職員が予算・ハード共に厳しい状況で運営している中、非常に真摯に受け答えをしてくださったのが印象的だった。

先程、説明の中でのアンケート結果の中に「有名な人を呼んで欲しい」という要望があったが、そういった要望をされる方と、自主的にコンサートをやっている方は同じ層なのか気になった。

委員長：全体を通して市民のニーズがどこにあるのか、全体の中のどの部分なのかが気になった。

委　員：はじめに７００～８００席程度のホールをイメージした場合、「市民が作って発表する」規模として妥当か、大きすぎることはないか、アーティストを招聘して市民が観る規模としては、興行する側から座席が少ないと言われる可能性はないか。

また、ジャンル（音楽、演劇など）によっても規模と、そのほかに求められる残響指数が異なる。つまり劇場の目的と何を重視するかで求められるものが異なる。

委　員：学習センターのアマチュアコンサートで入場者数２００人というデータがあったが、出演者が入れ替わる場合、それに伴ってお客さんにも入れ替わりがあり、実際の聴衆は常時１００名程度と想定される。それを踏まえると６００席のホールは想像できない。発表の場としてもギャップがあり、内容と空間密度が一致していない印象を受ける。

委　員：同感である。「素敵で音響の良いホールで発表したい」という気持ちはわかるが、そういう場と現状の市民活動の間にギャップがある。実際は２００席でも市民の発表会では厳しい。６００～８００席のイメージはアマチュアの発表というよりは、例えばコンクールの最終発表といった特殊な場合ではないか。

また、プロが使う上演施設を作ったとしても、年間の半分でもプロの興行で成り立つような集客施設がつくれるのだろうか。いくら投資するのか、維持できるのか、対象がプロかアマかの棲み分けは、イメージを持っておかなければならない。良いものが聴きたい、良いホールで発表したい、と言われるままに建設できるほど簡単な問題ではない。

委　員：文化ホールを建設、運営していくには「覚悟」が重要である。

劇場は高稼働率が重要とは限らない。稼働率が低いと、「稼働率は高ければならない」と思いがちだし、キャパが１，２００席なら「いつも１，２００席が満席でなければならない」という考え方にとらわれがちである。

公演数が少なかったとしても良いものを上演しなければ、底辺は拡がらない。一般的に「有名な人を見たい」「テレビに出ている人を見たい」「楽しいものを観たい」という意見が多いが、「本物の作品を観てみたい」という意見が少ない傾向がある。

また、「難しい＝わからない・つまらない」という声がアンケートに多い。芸術は他者を理解することである。「あなたはどう考えますか」という問いを客席に向けることで、初めて観客が考える力を持つ。そういった質の高い作品をやっていかないと意味が無い。そのためにもトップを拡げたいと常に思っている。私自身は「トップが専用的に使える劇場」と「市民が使える劇場」とを２つ持つということに現在取り組んでいる。

来場者の層として、市外が半分、市内が半分だと考えると、何に興味を集めるのか考えなければならない。「まちが元気」になるということの中には、市外から人が来ることによる経済効果もある。そのことにより市内の人が元気になる。全体を通して、市内の人の意見だけでは見落とすところがある。

委　員：「アートが面白い」ということに市民一般が興味を持つためには、多くの市民が凄いと思うようなインパクトがなければならない。そうしなければ、テレビやインターネットに面白いものが溢れている中で、劇場に足を運ぶようにはなかなかならない。みんなアートについて適度に知っているが、「凄い」と思えるものを観ないと、何も始まらない。かつて日本にサッカーは浸透しないといわれていたが、今は浸透しているし、プロ野球

も一度は人気が落ちたがメジャーリーガーが生まれたことで人気が高まった。「凄いもの」をみるとそれを目指す人が増える。こんどできるホールにどういうミッションを与えるのか、また作る以上は、そのミッションを実現させるという覚悟を市がもつ必要があるということをもう一度主張しておきたい。

委　員：体験型で文化芸術に参加する人は増えているが、観る側の考える力は弱まっている。そのため、観客がテレビのような面白おかしい作品に流れていくのが日本の現状である。参加型は自己満足で終わってしまう傾向が見受けられる。

アートに接することで人間形成をしていくことを怠っている現状に不満を感じている。

委　員：同意見である。ただ、「芸術はこういうもの」ということを、芸術に親しんだ人が落下傘のように降りてきて伝えるのではだめなのではないか。

「市民が欲している」というコンセンサスを基に構想がつくられなければならない。「いいものに出会いたい」とアンケートに書いてくれるような市民を増やす活動を行うのが、新しい施設あるいは機能だと願いたい。

公演をするだけではなく、どう考えるかが重要。ドラマに衝撃を受けてそれを再現したいと願って創ったという公演が増えて欲しい。「発表すれば十分」という人たちばかりのために施設が必要だとは感じない。誰のための施設なのかが重要な問題である。

委　員：「いいものを観せる」「これまで市内になかったものが行われる」ということと、「訪れて鑑賞して何かを得る」ということ、そして「発表の場」という機能が求められている。そうすると、鑑賞に適した劇場と、仮に１００～２００人規模で創りながら発表して、共有するという２つの場が必要になる。

それに対して、稽古場機能のような「創る」「学ぶ」「教える」「思索する」という場があることも重要である。

運営を考えると小ホールが出来て、学習センターが既に持っているようなコンテンツがあるとしても、作品をどう創るかという問題もあるし、指導する人の問題がある。「ホール機能」「創作支援機能」「十分な運営体制」の３つの条件が揃ってくると理想的である。その中のひとつに絞らなければならない場合には、不満が出てくることが予想されるが、まずはその３つの条件を考えていかなければならない。

委　員：確かに３つの条件が揃うのが理想的であるが、その中でどれを取るかという問題もあるかもしれない。アマチュアの目標の持ち方として「アマチュアの殿堂」を目指すのではなく、本来の目標は新国立劇場や東京文化会館や本多劇場の舞台に立つことかもしれない。「あのスターと同じ舞台に立ちたい」というのも、アマチュアのモチベーションのひとつといえる。そのためのステップとなりうる施設である。活動の結果、その檜舞台に上がることができるというストーリーが作れないだろうか。

委　員：結果的に「ここからプロになった」という人が育つ可能性もある。そのためにも、地元の中では「踊り場」的な役割でいいかもしれない。

これまでの議論を考えても、重要なのは公立劇場の役割は何かということである。公立劇場に重要なことは、お客さんを沢山人を入れることでも、沢山の人に使われることだけでもない。客席がいっぱいにならなかった理由として、「出演者が無名だから」という理由が挙げられるのだとしたら、いい芝居でも客が入らないものは上演してはいけないことになる。一般的に、「今お客さんが入らない＝ダメ」という意見があまりに多い。将来満席になるよう、観客を育てれば良いのではないか。「僕はあまり観に行かないけれど、あの劇場はいいことをやっているので応援する」と言える市民が増えることが理

想である。活動が認知されるまでの流れを作っていく必要がある。

委　員：公共ホールにおいて、自主事業で「客が入らない」と言われる原因の一部は、スタッフの努力不足・説明不足もあるのではないか。一例を挙げると、個々の公演にはその内容によって適正なキャパがある。ホールは一度建てたら客席のキャパは固定だが、そのキャパ＝動員目標数という企画だけをやっているわけではない。しかしそうした説明はいつまでたっても行われていない。もっと公演を名実ともに成功させる努力が必要で、そのためにはスタッフの技量が問われる。

またこうした建設の議論をする上で改めなければならないのは、行政の「ホールを利用する人」という対象が、いつも「演じ手の側」だけを対象にするという問題である。「チケットを買って観に来る、聴きに来る」という形でのアートへの参画し受容する市民に対しても同様に目配りをしないといけない。劇場は客席とステージとの関係で成り立っている。その観客に対する配慮、観客の意見がないがしろにされている。観る側が何を求めているか、研究する必要がある。

委　員：先ほどの意見をまとめると、大きなホールで見せるものと、小ホールで発表する場と分けたが、クオリティが高いコンテンツの中に小ホールでやる意味があるものがある。

また、あらゆるジャンルで小ホール程度のキャパを適正とするものは多い。観る側と発表する側を分ける以前に、空間の大きさ・性質としては、大・小２つあるのが良い。ホールには可能な限りのクオリティを求めるべきで、プロの上演に適したホールで、アマチュアのステイタス・目標になっていけばいいと思う。その上でスタジオ等があれば尚良い。

委　員：きちんと事業と施設を運営できる専門家を置くことが明確に示されているべきである。きちんとしたスペックのホールならば、それを管理できる技術者を配置すべきである。理想の全てが実現できないときに、一番大事なのは「人」である。聴衆を育てる人が必要である。「参加するだけで満足」ということではなく、「あれを観たけど、すごいんだよ」という感動が伝播するような、鑑賞を伝える力が必要で、それは即ち「人」である。

（２）提言書の策定にあたって

〇アドバイザーから「（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想への提言　目次案と検討内容について（資料１）」について説明。目次案と前回の検討内容が確認された。

〇アドバイザーから「（仮称）やまと芸術文化ホールに関する市民アンケート調査」について説明。３，０００通発送し本日の時点で１，０００通以上回収済みであることを報告。

①　質疑

委　員：文化振興プランがないとのことであるが、今後、策定していく動きは無いのか。

事務局：教育委員会の生涯学習部に指示が出ていると聞いている。

委　員：現在、神奈川県の文化振興指針がまとまりつつある。今後関連が出てくるのではないか。

委員長：現在の議論は施設の議論をしているようで、市の文化政策の話をしている部分もあるので、それを提言書の中で文化政策への提言としてまとめることで理解した。

委　員：高座渋谷に作ろうとしているホールについて教えて欲しい。

事務局：渋谷学習センターが移転し、その中に新しくホールができる予定である。

現在は設計段階であるが、性能としては学習センターの集会室に比べ、より良いものになる予定である。

② 意見

委　員：中長期プランの後押しがないと、劇場の長期計画が立たない。途中ではしごを外されるような思いである。

委員長：ハコだけつくって、その後何もフォローされないという状況は避けたい。

委　員：子ども達の成長に関わる項目をどこかに入れたい。子ども達自身はわかりやすいものを観たい・聴きたいとは言わない。わかりやすい物語を見せてもらわなくても、大人向けの本物の作品を十分楽しめる力を持っている。子どもの頃から本物を見せたら良い。そういったことを提言書のどこかに書いておきたい。

委　員：同意見である。子どもには、そのときわからなくても後でわかることが沢山ある。

委　員：先ほど、アマチュアの活動を議論させていただいた。常々思うが、一般論として「参加型のアマチュアの活動からいずれその地域を担うスターが生まれてくれれば…」と言われるが、体験した中からパフォーマーとして生きていける人が生まれる確率は低い。少し上手い程度でプロになれるわけではない。それが地続きであるかのように思われていて、努力して続ければプロになれると思っている人が多いと感じられる。アマチュアの発表の場と、プロになることをあまり近く考えないで頂きたい。あくまで、「趣味の域を出た素晴らしい能力を持った人が生まれる」というだけで、その能力だけで生計を立てられる人が生まれるわけではない。かと言って、参加型が悪いわけではない。実際、参加型の講座等を通して、良い輪が生まれている。日本の芸能には地続きのところがあり、芸の力は上がっていくが、それを生業とするかどうかで大きな区切りがある。この考え方が西洋のものにも持ち込まれている。能力が高まることと、プロになることの違いが一般的に理解されていない。様々なことを感じて、考える力を養う一助になると思っていただきたい。

委　員：本当のプロは易しいことばで説明できるが、中途半端なプロはわざわざ難しい言葉で説明しようとする傾向がある。ただ難解なものは、本当に芸術的な作品ではない。

委員長：参加型の活動をしている人たちの様子は市内を実際に見学し、理解できたが、今度は観る側の動向について、実際に東京まで観にいっているのかどうかなど具体的に知りたい。他の自治体では鑑賞団体から陳情が出たりしているが、大和市ではどうか。

事務局：過去にホール建設の陳情が出ている。陳情者は、基本的には自分達が演じる側の団体が中心になっていると聞いている。

委　員：日本独特の仕組みとして「鑑賞会」という仕組みがある。鑑賞だからいいのかというと、結果的に、ヘビーユーザーのための仕組みになる向きがある。文化に行政が関与するなら、熱心な愛好家を育てるのではなく、年に１回や２回劇場に訪れる人や、まったく来たことのない人、来られない人を含めて考えることが必要である。

委　員：市の文化施設の状況の中に、プライベートなホールについても入れて欲しいので調査して欲しい。

また、陳情の内容について、具体的な提案はあるか。

事務局：建設の早期実現への要望だったと記憶している。陳情書を改めてお示ししたい。

（４）その他

○ 次回はハードの検討だったが、運営に関わる部分の議論を継続することが承認された。

○ 事務局から全体のスケジュールの見直しを提案。次回、スケジュール案を提示することが承認された。

３．委員会資料

資料１「（仮称）やまと芸術文化ホール　基本構想への提案　目次案と検討内容について」

資料２「（仮称）やまと芸術文化ホールに関する市民アンケート調査」

「（財）大和市スポーツ・よか・みどり財団の主な芸術文化事業について」